

2012 年度大学入試センター試験 解説〈倫理〉

第 1 問 青年期の課題（配点 8）

問 1 正解は④。

- ④ センター試験倫理で定番の、グラフ読み取り問題である。余計な先入観を排除して、読み取った数値から正誤を判定することが肝心だ。「全体平均からプラス 1 以上の攻撃的反応を示す状況」は、子ども A・B ともに 1 項目のみであり、「限られている」との記述は正しいと判断できる。
- ① 子ども B は「仲間が親しげに近づく」で平均を上回る高い攻撃的反応を示しており、「いずれの状況においても全体平均を下回っている」は誤り。
- ② 前半の「二人の子どもはともに」とする記述が誤り。子ども B は年齢の離れた大人よりも年齢の近い仲間に対しての方が高い攻撃的反応を示す。
- ③ 前半の子ども A に関する「後者二つの状況でいずれも」という記述が誤り。「大人が罰を与える」の状況における攻撃的反応は、「大人がほめる」の状況を下回っている。

問 2 正解は①。

- ① かつての伝統的な共同体では、成人・結婚といった人生の節目において通過儀礼（イニシエーション）を行うことで、大人社会の仲間入りを認められた。むしろ自我同一性の確立に関わるものであり、「自我同一性の拡散を表す語句」として適当でない。
- ② 自意識が過剰になると、周囲の他者との折り合いが不安定になり、自我同一性の拡散（危機）の状況に陥る。
- ③ 自己を肯定的に受け入れられないのであるから、自我同一性の拡散（危機）の状況と言える。
- ④ モラトリアム人間とは、心理学者の小此木啓吾が、人生の選択を避けて猶予期間にとどまる青年を指して言った言葉。自我同一性が確立されていない状況である。
- ⑤ ピーターパン・シンドロームとは、アメリカの心理学者カイリーが、大人への成長を拒んでいるかのような男性を指して言った言葉。依存的であり、自我同一性が確立されているとは言えない。

問 3 正解は③。

- ③ シュプラングァーはドイツの心理学者・哲学者。その人が人生において追求する価値によって、選択肢文にある通りの 6 つの性格類型に分けた。

- ① アメリカの社会学者リースマンは著書『孤独な群衆』において、現代社会では他人指向型が支配的であると指摘した。よって「ほとんど見られなくなった」は誤り。
- ② 確かにドイツの精神医学者クレッチマーは性格と体型の関連を指摘したが、やせ型を分裂気質、肥満型を循環気質としており、後半の記述は誤っている。また、リビドー（心的なエネルギー）の向かう方向性によって内向型・外向型に分類したのは、スイスの心理学者ユングである。
- ④ アメリカの心理学者オルポートは、成熟した人格の特徴として選択肢文に挙げられた要素に加えて、「現実世界を直視し、問題を解決していく知覚と技能」の6つを指摘した。なお、ビッグファイブ理論とはオルポートの研究を受け継いだゴールドバーグらが提唱した性格特性論だが、教科書での扱いはない。

第2問 源流思想（配点 24）

問1 正解は③。

- ③ アリストテレスは人間の活動のうち理性の活動＝**観想（テオリア）**こそが最高善であるとした。
- ① ストア派が理法に従うような生き方を提唱した点は正しいが、「精神的快楽」を求めたのは**エピクロス**。
- ② 代表的ソフィストのプロタゴラスは、人間を万物の尺度であるとした。「最高の真実在である善そのもの」「哲学者が国家を支配すべき」は**プラトン**に関する記述。
- ④ エピクロスではなく**プロタゴラス**に関する記述になっている。

問2 正解は①。

- ① ソクラテスは自身の問答法を「**産婆術（助産術）**」とも呼んでおり、相手に真理を教え込むのではなく、対話のなかで相手自身に矛盾や無知を自覚させるという手法をとっている。
- ②③④ ソクラテスは「**無知の知**」の立場、つまり自分が「善に関する真理」に関して無知であるとの立場に立っているので、知者として無知な相手を「知へと誘う」ことや「教授」することはありえないし、自身の「優れた考え」を通して相手に無知を自覚させようとしたわけでもない。

問3 正解は④。

- ④ ブッダは、ウパニシャッド哲学において前提されていた自己の本質たる**我（アートマン）**を実体として捉えてはならないと主張している。ブッダによると、人間とは五蘊の寄せ集めに過ぎないとされる。

- ①②③ いずれも「自分の本質」「真の自分」といったものを前提にしている記述だが、これを否定し、自己へのこだわりを捨てるところに仏教の核心がある。なお、本問は 1999 年度本試験 第 1 問 問 3 とほぼ同一の問題（表現に若干の修正がある）である。

問 4 正解は①。

- ① 竜樹（ナーガールジュナ）は大乘仏教の理論形成に大きな役割を果たした人物で、ブッダの説いた「無我」の思想を継承して「空の思想」を大成した。
- ② 大乘仏教の基本的な考え方である「一切衆生悉有仏性」についての説明になっている。
- ③ 世親（ヴァスバンドウ）は大乘仏教の唯識思想を大成した人物だが、ウパニシャッド哲学についての説明になっている。
- ④ ジャイナ教は仏教とほぼ同時代に形成され、仏教と同じくバラモンの権威を否定する宗教だが、唯識思想についての記述になっている。

問 5 正解は③。

- ア 朱子に関する記述。理気二元論の世界観および居敬窮理の修養法についての説明になっている。
- イ 墨子に関する記述。儒家が近親者に対する自然な愛を重んじたのに対し、墨家を開いた墨子はこれを差別的であるとして否定し、差別のない兼愛を説き、これが平和の基礎であるとした。
- ウ 老子に関する記述。儒家が秩序の維持のために様々な徳目を涵養すべきことを説いたのに対し、道家の祖である老子は人間のありのままの姿に立ち戻るべきだとして無為自然を説いた。
- エ 韓非子に関する記述。法家を代表する韓非子は、師である荀子の礼治主義を受け継ぎつつ、より実効的な統治を求めて、徳による統治を否定し、信賞必罰を旨とする法治主義の立場を打ち立てた。

問 6 正解は④。

- ④ クルアーンにおいては第 2 の戒律、モーセの十戒においては第 5 の戒律で両親を敬うべきことが説かれ、またクルアーンでは第 2 ～ 8 が、モーセの十戒では第 5 ～ 10 が社会的な掟と考えられる。
- ① ユダヤ教ではモーセの十戒の第 2 で偶像崇拜が禁じられている。
- ② イスラーム教の神は超越的、絶対的な唯一神である。クルアーンにおける第 1 の戒律でも、神に並び立つものがありえないとされている。
- ③ モーセの十戒の第 4 では安息日が定められているが、これは「人間の健康と福祉」のためにあるのではなく、神の世界創造に感謝し祈るためである。

問 7 10 正解は②。

- ② ユダヤ教では伝統的に正しい行いを守るかどうかが問われたが、イエスは行いよりも内面を重視し、罪の自覚と悔い改め、そして神による赦しを信じるよう説いた。
- ① 人間の救済が予め定められているというのはカルヴァンらの説いた**予定説**。
- ③ キリスト教では無力で罪深い人間が、悔い改めにより慈悲深い神の赦しを受けると考えられており、**自由意志**により罪から脱却できるというのは異端的な主張である。
- ④ 「律法を厳格に遵守する」ことを強調したのはユダヤ教の**パリサイ派の律法主義**であって、イエスはこうした形式化した教えを批判した。

問 8 11 正解は②。

教父哲学の代表者とされる**アウグスティヌス**についての記述。若い頃に様々な思想的立場を遍歴してきたアウグスティヌスは、人間が悪になびきやすいことを痛切に感じていた。そこで彼は、自由意志による善行とその結果としての救いを断念し、ひたすら悪に向かわざるをえない人間がもつばら神の**恩寵**によってのみ救われるという立場を打ち出し、カトリック教会の正統教義を確立した。

トマス・アキナスは『**神学大全**』を著したスコラ哲学の大成者、マルクス・アウレリウスはローマ帝国の皇帝で、『**自省録**』のなかでストア派の哲学的境地を綴っている。

問 9 12 正解は③。

- ③ 最終段落にまとめられている趣旨と合致する。「外からの働きかけ」に関しては、第3段落で様々な思想家が重視してきたことが述べられている。
- ① 「生まれながらの悪なる本性から自由になる」のではなく、自己を正しく認識することで、自己を律することの重要性が理解できると述べられている。また「自己の外に目を向け」ることが否定されているが、これは第3段落の記述と矛盾する。
- ② 「自らの悪に過度に思い煩わされる」べきでないとされるが、最終段落では「自己のあり方を真剣に見つめ、悪を引き起こす無知や欲望の存在を自覚すること」が重要だと強調されている。また「悪が何であるかは文化ごとに異なる」といった趣旨はリード文に一切ない。
- ④ 「社会的な規律に従うことの是非を批判的に検討」すべきだとされるが、第3段落ではむしろこうした規律が「自分を内から見つめ直す契機」になりうるものとして肯定的に言及されている。

第 3 問 日本思想 (配点 24)

問 1 13 正解は②。

- ② 古来日本では、自然物や自然現象に靈魂の存在を認めるアニミズム的な風土の下、カミ（神）は全知全能というよりも不可思議で畏怖すべきものとして捉えられてきた。
- ①③ 西洋における神の捉え方である。
- ④ 古代インドのウパニシャッド哲学において説かれたブラフマン（梵）についての説明。

なお、本問は 2003 年度本試験第 3 問問 1 とほぼ同一である（④の誤肢のみ変更）。すでに大学入試センターより過去に出題した問題の利用が公表されていたが、ほぼそのまま用いられたのは「倫理」では初めてのケースである。過去問演習の重要性がさらに高まったと言えよう。

問 2 14 正解は③。

「和」を重んじる日本の伝統的な共同体では、カミ（神）や他の成員に対して偽ることのない明るく朗らかな心（清き明き心）をもつことが望ましいとされてきた。①赤心か③黒心かで迷うところだが、「腹黒い」といった慣用表現を思い浮かべれば③を選べるだろう。なお、「赤」は「赤裸々」などと言うように、隠し立てのないことを意味する。

問 3 15 正解は④。

資料文の要点は 3 つ、(1) 人は死ねば善人・悪人の区別なく黄泉国に行く、(2) この世で死ぬことほど悲しいことはない、(3) 儒教や仏教は悲しむべきでないと屁理屈をつけているが、それは真実ではない、である。④にある「いたずらに死の悲しみを克服しようとするべきではない」との記述は、(3) の内容を裏返したものであり、正しいと判断できる。①は「いたずらに死を悲しむべきではない」、②は「死を悲しまず」、③は「死を悲しむことなく」が、(2) の内容に反する。

なお、本問の資料文（本居宣長『鈴屋答問録』）は、2001 年度本試験第 3 問問 5 で同一箇所を現代語訳したものが用いられている。

問 4 16 正解は①。

- ① 本願（誓願）とは、阿弥陀仏が立てた一切の衆生を救うという誓いのことで、48 あるので四十八願とも言う。南無阿弥陀仏の 6 字の「名号」を唱える者はみな極楽浄土に往生させるという誓いは、第十八願にあたる。また、阿弥陀仏の本願が説かれている経典は『無量寿経』、阿弥陀仏のことを無量寿仏（限りなき寿命をもつ仏）とも呼ぶ。
- ② 「唱題」とは、南無妙法蓮華経と題目を唱え、法華経に対する帰依の意を表すこと。

- ③ 「真言」とは、密教において宇宙の根本仏とされる大日如来の言葉のこと。また、『法華経』も誤り。
- ④ 「ひたむきに坐禅にはげむ」とは、道元が説いた只管打坐のこと。また、『法華経』も誤り。

問 5 17 正解は②。

- ② 「業」はカルマともいう。結果をもたらす行為のことであり、良い行為は良い結果を、悪い行為は悪い結果をもたらす。因果応報とは、過去の業が原因となって現在の結果を、現在の業が未来の結果をもたらすことをいう。
- ①③④ 「一切皆苦」を加えると仏教の四法印になる。

問 6 18 正解は①。

- ① 「勤皇」の語がヒントとなっている。松下村塾を開いて高杉晋作・伊藤博文らを育てた吉田松陰は、幕府・諸藩の枠組みをこえて民衆が天下万民の主君である天皇の下に結集すべきことを説いた。
- ② 「孔子」「愛」「忠信」などの語から、伊藤仁斎の思想についての記述とわかる。
- ③ 「万人が直接に農業に携わる自給自足の生活に復帰すべき」との文言から、安藤昌益の思想についての記述とわかる。
- ④ 「分に応じた儉約」「天地や他者の恩恵に報いなければならない」などの文言から、二宮尊徳の思想（報徳思想）についての記述とわかる。

問 7 19 正解は④。

- ④ 明治時代を代表する啓蒙思想家である福沢諭吉が、「東洋になきもの」として指摘したのが、a「独立心」（他人や政府に依存しない自立した精神）とb「数理学」（合理的で実生活に役立つ西洋の諸科学）の2つである。
- ① a「独立自尊」は「独立心」の別の言い方として正しいが、b「民本主義」は大正デモクラシー期の政治学者である吉野作造の造語。
- ② a「東洋道徳」は、幕末の思想家である佐久間象山が説いた言葉「東洋道徳、西洋芸術」の一部。b「実学」は「数理学」の別の言い方として正しい。
- ③ a「忠孝心」は、戦前における教育の基本原則を示した教育勅語で中心的な徳目とされたもの。b「人権論」は福沢諭吉が主張した天賦人権論から引いている。

問 8 20 正解は③。

- ③ 唯物論とは、精神ではなく物質を根源的な実在とみなす思想的な立場のことである。資料文では、「軀体」は「若干元素の抱合になれるもの」であって、人が死んで解離しても「各元素皆不滅」なのであるから、「地獄の畏るべき」でもないと述べられている。よって、「生死」を「構成する諸元素の離合集散作用の一コマにすぎない」とする③が正解。中江兆民のこの議論は、古代ギリシアの思想家エピクロスを思わせる。
- ① 「諸元素の離合集散の仕方が異なる」が誤り。
- ② 「諸元素の離合集散の回数が多いために生じる」が誤り。
- ④ 「無生物とは構成する諸元素の種類を異にする」が誤り。

問 9 21 正解は②。

- ② 前半の記述は近代以前について述べられた第 2～第 3 段落の内容に合致する。後半の記述もリード文の内容に矛盾しない。というよりも、明治期になると「近代以前とは異なる安心のかたち」が示されるようになるのだから、結論としては近代以前と明治期のどちらの立場にも偏らない、無難なことしか述べられないであろう。センター試験倫理特有の内容合致問題では、そういった選択肢が正解になることが多い。
- ① 「超越的な観念に拠らない文明観」は、明治近代に現れた傾向にすぎない。
- ③ 「人間とは対立しない自然観」への言及はリード文にない。
- ④ 近代以前の「超越的な観念に基づく宗教観」について、明治期には否定的に見られていた。

第 4 問 西洋近代思想（配点 24）

問 1 22 正解は④。

- ④ デカルトの主著『方法序説』の冒頭に出てくる有名な句である。人間理性（＝良識）への信頼を表明した言葉であり、思想の領域における人権宣言とも言われる。
- ① イギリス経験論の祖であるベーコンの言葉である。
- ② 大陸合理論の展開においてデカルトを批判したスピノザの言葉である。神のつくったこの世界においては人間の自由意志も偶然もいっさい存在しないとして、神のつくった世界をその必然性において捉えることをこの言葉で言い表した。
- ③ フランスのモラリストであるパスカルが著した『パンセ』のなかの言葉で、人間の卑小さを言い表している。

問 2 23 正解は③。

- ③ 常識的には、まず認識されるべき対象が存在し、人間の認識とはそれを正確に捉えることだと考えられているが、カントは人間の認識能力が認識されるべき対象を能動的に構成するものと考えた。これをカントにおけるコペルニクスの転回という。
- ① イギリス経験論の哲学者ロックの立場。ロックは経験によらない生得観念をいっさい認めず、生まれたばかりの人間の心をタブラ・ラサ（＝白紙）と呼んだ。
- ② デカルトをはじめとした大陸合理論の考え方。カントは、経験論も合理論も一面的だとして、両者を統合する独自の認識論を構築した。
- ④ ヘーゲルの弁証法についての記述。

問 3 24 正解は①。

- a 「延長」が入る。デカルトは世界のあらゆるものを精神と物体という二つの実体に分け（物心二元論）、前者の本性を「思惟」、後者の本性を「延長」に求めた。
- b 「自然権」が入る。自然権とは万人が生まれながらに持つ権利のことであり、こうした権利を想定するところから、社会契約説の議論が成立した。
- c 「国家」が入る。社会契約説では国家の起源を自然権を持つ人民の契約（同意）に求める。なお「ファランジュ」とは空想的社会主義者フーリエの目指した協同組合のこと。

問 4 25 正解は②。

- ② ドイツの文豪ゲーテは汎神論的な自然観を抱いていたため、自然界を構成要素に分解するような機械論的な立場に我慢できなかった。彼は『色彩論』などでニュートンの光学論を正面から批判している。知識としてはかなり細かいが、消去法で解答に至ることができる。
- ① プトレマイオスは紀元2世紀の天文学者で、古代の天動説を理論的に基礎づけた人物。
- ③ ニュートンは万有引力の法則を発見し、機械論的な自然観を基礎づけたと言える。
- ④ ベーコンは汎神論的な立場に立っていたわけではなく、機械論的自然観の批判を行ったわけでもない。

問 5 26 正解は③。

- ア 「ホモ・ファールベル」は「工作人」と訳される概念で、Bの記述に対応する。フランスの哲学者ベルクソンが提唱した。
- イ 「ホモ・ルーデンス」は「遊戯人」と訳される概念で、Dの記述に対応する。オランダの歴史家ホイジンガが提唱した。

ウ 「ホモ・サピエンス」は「英知人」と訳される概念で、Aの記述に対応する。スウェーデンの植物学者リンネが提唱した。

エ 「ホモ・レリギオース」は「宗教人」と訳される概念で、Cの記述に対応する。ルーマニア出身の宗教学者エリアーデが提唱した。

問6 27 正解は①。

- ① ハイデggerによると、多くの人はその他大勢の「ダス・マン（ひと）」のなかに頹落してしまっているが、自分が「死への存在」であることを自覚するならば、自己の固有の在り方に目覚めることになる」とされる。
- ② ニーチェに影響を与えたショーペンハウアーの思想的立場が述べられている。
- ③ 実存主義の先駆者キルケゴールの説く宗教的実存についての記述。
- ④ ニーチェの思想的立場が述べられている。

問7 28 正解は④。

- ④ フッサールはハイデggerの師であり、現代哲学の源流の一つである現象学を創始した哲学者。常識的な世界像を受け入れる自然的態度をとるのではなく、判断停止（エポケー）のうえ意識に現れる世界をありのままに記述する現象学をとらえた。
- ① サルトルの立場。サルトルもフッサールの現象学の研究から出発している。
- ② イギリス経験論の哲学者バークリーの思想的立場。
- ③ 20世紀前半のイギリスで活躍した哲学者ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』の有名な一節。ウィトゲンシュタインは20世紀の英米哲学に絶大な影響を与えている。

問8 29 正解は②。

- ② 「他の人を支配する」ことの是非については資料文で言及されていないが、みずからの労働の成果に対する所有権は是認されているので、生産手段の所有についても否定はされていないものとみなせる。他の選択肢は正しい記述なので、②が適当でない記述だと判断できる。
- ① 資料文 7-8 行目の「少なくとも……場合には」の条件と対応する。
- ③ 資料文 1-3 行目の記述と対応する。
- ④ 資料文 1-2 行目の記述と対応する。

問 9 30 正解は②。

- ② 第 4 段落で、デカルト的発想は、主観と客観の二項的対立図式についてはハイデッガーから、心身二元論についてはメルロ＝ポンティから批判されたとある。まとめの第 5 段落でも身体が人間にとって本質的要素であることが示されている。
- ① 「生命なき身体」と「生きた身体」という対比はなされていない。
- ③ 「物質的身体」と「非物質的な心」という対比はデカルトによって定式化されたものであり、リード文ではまさにその限界が指摘されている。
- ④ 身体が「世界と相互作用する主観的存在である」とされているが、これは主観と客観を分離したうえで相互作用が起こるとの立場による記述である。リード文第 4 段落では「身体は主体であるとともに客体でもある」と言われており、こうした主客二元論の克服が主張されている。

第 5 問 現代社会分野（配点 20）

問 1 31 正解は⑤。

- 事例組合せ問題は、第 1 問で出題されることが多いが、本年度は第 5 問で出題された。条件に即して考えれば確実に正解にたどりつける。
- ア 「十分に深い麻酔をかける」ことで動物が受ける苦痛を軽減しているので、C に該当する。
 - イ 「情報を共有することで、重複する実験を行わないように」すれば、動物使用数を削減することができ、A に該当する。
 - ウ 動物実験の代替手段として「目の組成によく似た細胞」を用いているので、B に該当する。
 - エ 「水や餌を与え」、「実験動物のいる空間を適切な温度に維持する」ことは動物が受ける苦痛の軽減につながると考えられるので、C に該当する。

問 2 32 正解は③。

- ③ バイオテクノロジーに関する突っ込んだ問題が出題された。体細胞クローンを作成するため移植する核に、遺伝子組み換え技術を用いて有用な特徴を発現させる遺伝子を組み込めば、免疫拒絶反応のない人工臓器を安定的に供給できるようになると考えられている。
- ① 「男女の判別や産み分けはまだできない」が誤り。技術的に可能となったからこそ、倫理的な問題が生じている。
- ② たしかに世界的なヒトゲノム・プロジェクトによってヒト DNA の塩基配列の解読は完了しているが、遺伝子の働きが「すべて解明」されたわけではない。今後に残された研究課題である。

- ④ 「安全性や環境への影響を疑問視する声はなくなった」が誤り。遺伝子組み換え作物と在来種との交雑による**遺伝子汚染**は問題となっているし、日本では安全性への不安から栽培を条例で規制する地方自治体も多い。

問 3 33 正解は⑦。

改正臓器移植法に関する問題である。2009 年の主な改正点は、(1) 脳死を一律に「人の死」とみなす（一部異論もある）、(2) 脳死した本人の拒否の意思表示がない場合、家族の承認によって臓器移植が行える、(3) 15 歳未満の者の臓器提供を認める、の 3 点である。

- ア 14 歳であるので改正後に初めて認められた。C に該当する。
 イ 15 歳であるので改正前から認められていた。A に該当する。
 ウ 本人の拒否の意思表示がある場合は、改正後も臓器提供は認められていない。B に該当する。

問 4 34 正解は③。

- ③ カントの言う**自律**とは、自らにそなわる理性（実践理性）が打ち立てた道徳法則に従うことであり、そこに自律的に行為する道徳的な主体としての人格を見出した。
 ① 「適切な欲望を自分で選ぶ」が誤り。
 ② 「神が与えた」が誤り。
 ④ 「構想力が自ら生み出した」が誤り。

問 5 35 正解は④。

- ④ 資料文の最後の一文「問題は～苦痛を感じることができるかなのである」がポイント。ベンサムは快楽と苦痛が人間を支配するという自然的な事実から出発して、快楽を善、苦痛を悪とみなす功利の原理を道徳的な判断の基準とした。
 ① 「快楽の量と質の区別を重視した」が誤り。ベンサムの説いた快楽計算の説に反する。
 ② 「知性」が「境界線になる」とする記述が誤り。資料文でベンサムは、「思考の能力や話す能力の有無」に「何の意味があるだろうか」と述べている。
 ③ 「道徳感情を正と不正の判断基準にする」が誤り。

問 6 36 正解は②。

- ② 循環型社会とは、限りある資源を有効活用することで自然界への廃棄量の最小化を目指す社会のこと。石油など化石燃料の枯渇性エネルギーから太陽光・風力など再生可能エネルギーへの転換や、3 R（リサイクル・リユース・リデュース）の取り組みなどが求められる。
- ① 環境アセスメントについての説明を利用した作文。
- ③ 世代間倫理についての説明を利用した作文。
- ④ 「地球規模で考え、足元から行動する」の意味の説明を利用した作文。

問 7 37 正解は①。

「日本の公害の原点」がヒントとなる。明治時代の政治家であった田中正造は、足尾銅山から排出された有毒物質が渡良瀬川流域の農地に深刻な被害をもたらしている問題に取り組み、1901 年には衆議院議員の職を辞して明治天皇への直訴に及んだ。

石牟礼道子は、著作活動を通じて故郷で発生した水俣病の問題に取り組んだ作家。南方熊楠は、明治政府の発した神社合祀令に対して鎮守の森の生態系が失われるとして反対した生物学者・民俗学者。田中正造と合わせたこの 3 人は、2001 年度本試験第 4 問問 2 でそろって出題されたことがある。

問 8 38 正解は④。

- ④ Y さんの「人間と動物は対等な生命と考えるべき」との発言を受けた、Z さんの最後の発言の内容に合致する。「批判している」という表現が引っかかるが、以下に見るように他の選択肢には明らかなキズがあるので、最終的には消去法で正解を確定させれば良いだろう。
- ① 「人間より動物を優遇する余地を残すことが重要」「自分の利益になるようにお互いを利用し合う点での平等こそが大切だ」とする主張は、リード文の Y さんの発言からは読み取れない。
- ② 前半の記述は正しいが、後半の「友愛に基づいた人間中心主義」との考えは、リード文の Z さんの発言からは読み取れない。
- ③ 前半の記述は正しいが、後半の「人間は傲慢さを捨て」れば「理性的な能力が一層高まり」とする内容は、リード文にない。